

2019. 6. 20

畑 啓之

「日本の小中学校でのデジタル教育に遅れ」と騒ぎ立てるが

まずICTとは何なのか。大人でもこれを間違いなく理解している人は少ないのではないか。それを小中学校で教育に利用しなければ、との話である。

ICT：情報技術 (Wikipedia)

情報技術とは、情報に関する、特にコンピュータなどの技術 (の総称) に関連した表現である。また、通信を含めて情報通信技術 (information and communication technology、ICT) という表現も使用されている。

平成 26 年度文部科学白書より

第 11 章 ICT の活用の推進

教育における ICT (情報通信技術) の活用は、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や子供たちの主体的・協働的な学び (いわゆる「アクティブ・ラーニング」) を実現する上で効果的であり、確かな学力の育成に資するものです。また、ICT を活用することによって、一人一人の子供たちの能力や特性に応じた「個別学習」や、子供たちが教え合い学び合う「協働学習」の効果的な実施が可能になります。さらに、特別な支援が必要な子供たちに対して、障害の状態や特性等に応じて活用することは、各教科や自立活動等の指導においても極めて有用です。

教育における ICT の活用については、「日本再興戦略 (平成 25 年 6 月 14 日閣議決定)」や「第 2 期教育振興基本計画 (25 年 6 月 14 日閣議決定)」、「世界最先端 IT 国家創造宣言 (25 年 6 月 14 日閣議決定) (26 年 6 月 24 日一部改訂)」などにおいて位置付けられています。また、26 年 4 月には「ICT を活用した教育の推進に関する懇談会」を開催し、8 月末に報告書 (中間まとめ) を公表しました。さらに、26 年 9 月からは、教育再生実行会議第 1 分科会においても議論を行い、27 年 5 月に第七次提言を取りまとめました。その中で、ICT の活用による学びの環境の革新や情報活用能力の育成などについて、今後の方向性を示したところです。

文部科学省では、教科指導等における ICT の効果的な活用によって子供たちの主体的・協働的な学びや学力の向上を実現することを目指しています。

今日の新聞記事を読んでも何がしたいのかが見えてこない。記事左上の図には「ICT を活用した指導などが日本は遅れている」とあり、この文面からは授業に ICT を取り入れて効率

的・効果的な授業を心がけているか、ということになる。ICT は授業理解のためのツールである。

ところが、下から3段目には「ICTに関する研修ニーズは高まっている」とあり、小中学校の教員はICT技術を身につけることを望んでいる、あるいは、望まれている。

そして、次に来るパラグラフが「想像力や批判的思考力を鍛える指導力も日本は見劣りする」である。このパラグラフとICT教育のつながりが全くの不明である。

そして極めつけは最後のパラグラフ。「人工知能など先端技術が発達・普及する将来社会を見据え、小学校では20年度からプログラミング教育が必須化される」。

何のためにICTに精通しなければならないのか？ この記事の論旨の中心は学校教育にICTを取り入れることにより学習効果が上がる、との前提があるものと思う。そのためには、小中学校の教師はICT技能を身につけ、それを教育に活かしていかなければならない、と読み取れる。

世界の国々がやっているから、「日本も当然のことながらやらなければならない」はどう考えても意志薄弱である。「すぐ使えるものはすぐに使えなくなる」という言葉もあるが、簡単に見つかった答えは、その時はわかったような気になるが、自身は何の苦勞もしていないので、学習したことにならないということである。そして、ともかくは試験で良い点が取れるかもしれないが、その知識は知恵にまで昇華されることはない。やはり、苦しみ抜いて問題を解決していくところに知恵が生まれるし、その苦しみの過程を通して問題解決の方法論も生まれてくる。これこそが創造することを教え込む教育である。

はたしてICTは知恵を作り出せる「玉手箱」となり得るのか？ はなはだ疑問である。従来の授業の一体どこが悪いのだろうか？ 私が思うに、小中学校のカリキュラムにあれも必要、これも必要、と非常に多くの事柄が盛り込まれ、普通に授業をしていたのではとても定められた年間の授業時間内には終わらない。そこで、ICTを用いて授業の効率化を図り、決められた授業時間内に指導要領に定められた全科目を当てはめようとしているだけのよな気がする。

最後のパラグラフにある「プログラミング教育」は、うまく題材を選べば論理力強化のツールとして利用できるが、国がそこまで考えているかははなはだ疑問である。

